

幼少期に中国と日本を往還した若者のキャリア形成とその解釈

ー移動経験との関連性と経験活用の視点からー

藤越（早稲田大学）

1. はじめに¹

近年、幼少期より国の移動を経験し、複数言語環境で育った若者が増加している。彼らのキャリア形成は、学校教育の次の段階として研究に値する。本研究は、中国に生まれ、幼少期に日本で数年間滞在し、その後中国に戻る経験をした若者、（以降、「幼少期に中国と日本を往還した若者」、もしくは「若者たち」と称す）のキャリア形成について論じる。

2. 研究の背景と目的

「キャリア」は、「職業や職務経歴に関する多義的な概念」とされており（渡辺 2018）、研究者によって異なる視点から定義されている。本研究では、フルタイムでの就業だけでなく、その準備段階ともいえる高等教育の段階も「キャリア」の一部と見做し、その間の職業に関する様々な選択を「キャリアに関する選択」と捉える。具体的には、高校卒業前後以降の、大学の専門・専攻、大学卒業前後の職業・進学、転職に関する選択を含む。

先行研究では、移動経験とキャリアの関係について以下のことを明らかにしている。まず、キャリア意識と移動経験との関連について、幼少期に移動した国や言語に関連するキャリアを志向する者、グローバルなキャリアを志向する者、移動経験と関連の無いキャリアを形成する者がいることや、この志向性が年齢に応じて変化しうることが分かっている（坪田 2018, 人見・上原 2018, 藤 2024）。また、キャリア形成に影響する要因として、家族・教師からの助言、移動経験への認識や態度、言語能力、学校制度や社会環境などが指摘されている（岡村 2011, 坪田 2018, 人見・上原 2018, Vázquez et al. 2018）。

一方、若者たち自身が、キャリアと幼少期の移動経験との関連性について、どのように解釈しているかについての考察は十分とは言えない。また、先行研究の研究対象は、幼少期に日本に移住した後定住した者や、日本と英語圏の往還を経験した者が中心であり、中国と日本の往還については十分に明らかになっていない。そこで、本研究では、幼少期に中国と日本を往還した若者のキャリア形成について、以下の2つの課題を明らかにすることを目指す。

- 1) 若者たちは、キャリアに関してどのような選択をしているか。
- 2) 若者たちは、自身のキャリアに関する選択をどのように解釈しているか。その解釈は、キャリアが幼少期の移動経験との程度関連があるかで、違いはあるか。

3. 研究方法及び研究協力者

本研究では、半構造化インタビューを用いてデータを収集した。2020年12月から2023年10月にかけてZOOMで実施し、インタビュー時間は1名につき平均3.3時間であった。質問項目は、主に、現在の職業、大学・大学院での専門、幼少期の経験とキャリア形成との関連についての認識、職業選択に影響した要因等についてある。収集したデータは、オープン・コーディング（佐藤 2008, サトウ・春日・神崎 2019）の手法を用いて分析した。データ分析では、インタビューデータを文字化・切片化し、研究目的である「キャリア選択への解釈、および移動経験との関連の有無による違いの解明」を鑑みてラベル付けを行い、類似したラベルをまとめ、抽象化する作業を行った。

本研究の協力者は、幼少期に中国と日本を往還した若者6名である。6名とも、両親が大学院生として日本に留学する際に、帯同家族として来日しており、日本滞在時は現地の小学校・中学校に通学していた。以下、協力者のプロフィールを表1に示す。

¹ 本研究はJSPS 科研費24K22474の助成を受けたものである。

表1 研究協力者のプロフィール（インタビュー時点）

仮名	年齢	性別	日本滞在時の 年齢（幼少期）	職業	現住地	成人後の国の移動経験 （国：年齢）	インタビュー 使用言語
トーマス	29	男	6-11	大学院生 ¹⁾	日本	アメリカ：19-27；日本：29-	中国語
ヤオ	32	女	7-13	ポスドク研究員	日本	日本：24-	日本語
ヒトエ	32	女	8-15	アーティスト（画家）	中国	アメリカ：24-28	日本語
キヨ	34	女	6-10	大学院生 ¹⁾	中国/日本 ²⁾	日本：24-	中国語
シャンファ	33	女	2-12	会社員	日本	日本：20代後半-	日本語
グリ	33	女	9-14	自営業	中国	カナダ：23-25	中国語

1) 社会人経験あり 2) 日本の大学院に在籍しているがコロナ禍で中国に一時帰国中

4. 研究結果

本節では、4.1 節で、若者たちが高校卒業前後からインタビュー時の各段階において、どのようなキャリアに関する選択してきたか、概要を示す。4.2 節では、キャリアと移動経験が関連している場合とそうでない場合で、若者たちがどのように自身のキャリアを解釈しているかを論じる。

4.1 若者たちのキャリアに関する選択

若者たちは、高校卒業前後からインタビュー時に至るまで、キャリアに関して複数回の選択をしている。まずは、高校卒業前後、大学卒業前後、就職後の各段階において、どのようなキャリアに関する選択を行ってきたかを表2にまとめる。

表2 若者たちのキャリアに関する選択

仮名	高校卒業前後	大学卒業前後	就職後
	アメリカ留学		中国へ・起業
トーマス	(language school → community college → university・化学専攻)	アメリカで就職（電気工事関連）	(電気自動車関連・対日業務無) 日本へ・大学院進学
ヤオ	中国で大学進学（食品工学専攻）	日本へ・大学院進学（化学専攻）	日本で就職（ポスドク・化学）
ヒトエ	中国で大学進学（デザイン専攻）	アメリカへ・大学院進学 (美術・絵画専攻)	中国でアーティスト
キヨ	中国で大学進学（土木工学専攻）	日本へ・大学院進学 (日本語教育専攻)	日本で中国語教師 日本語教師経験有
シャンファ	中国で大学進学（日本語専攻）	中国で日系企業就職（対日業務有）	日本へ転職（対中業務有） 日本で転職（対中業務有） 部署移動（対中業務無）
グリ	中国で大学進学（日本語専攻）	カナダへ留学（環境保全専攻）	中国へ・起業 (服飾関連・対日業務少)

表2より、高校卒業前後より、若者たちは多様性のあるキャリアに関する選択を行っていることが分かる。以下、これらの選択を、キャリア形成の場所とキャリアの内容の2つの視点から分析する。

キャリア形成の場所は、中国以外に、日本や北米を選択する者がいる。大学進学の際は中国を選択する者が多い一方、大学卒業や就職の際には、中国以外への移動を選択する者が増える。その際、幼少期に滞在していた日本を選択した者も、日本ではなくアメリカやカナダを選択した者もいる。また、中国以外の国で数年間滞在した後、中国に戻る者もいる。

キャリアの内容については、日本語関連の専攻や、日中を繋ぐビジネス、日本語教師等、幼少期の経験と直接関連のあるキャリアを選択する者がいる。一方で、理工学系や芸術系、日本と関係のないビジネス等、幼少期の経験と関連しないキャリアを選択する者もいた。協力者単位でみると、一貫して幼少期の経験とは関連しない内容のキャリアを選択している者が3名、ときに幼少期の経験と関連のある内容と、関連がないあるいは少ない内容の間で揺れ動いている者が3名であった。

4.2 キャリアに関する選択への若者たちの解釈

本節では、若者たちが、自身のキャリアに関する選択をどのように解釈しているか、そして、その解釈が、キャリアと幼少期の移動経験の関連によって違いがあるか否かを探求する。

4.2.1 幼少期の移動経験と関連のあるキャリアを選択した場合

まずは、幼少期の移動経験と関連のあるキャリアを選択した場合について示す²。つまり、学業や就業の場所として日本を選択した場合、あるいは、日本や日本語に関連する専攻・業務を選択した場合である。この場合、若者たちは概ね、幼少期の滞在経験によって得た複数言語能力や両国への理解を、キャリアの上で活用できていると解釈しており、そのことを喜ばしく感じていた。例えば、日本留学に際し、「日本語能力がほかの留学生に比べてアドバンテージである」〈トーマス〉、「日本と中国の文化を両方知っている」ため、「コミュニケーション役として介在できる仕事がある」〈シャンファ〉、日本語の「発音面でアドバンテージがある」ため日本語教師を目指し、研究面でも日本語教師の業務でも生かすことができている〈キヨ〉等の解釈があった。また、幼少期の経験で愛着を持っている日本で就職し、社会保険料を納めるようになって、「日本社会で自分の力で生きてる」ことを改めて実感した〈ヤオ〉という言葉もあった。

一方、幼少期の経験を成人後も活用し続けることに対し、若干の後悔の念を抱いている者もいる。例えば、シャンファは、大学時代日本語を専門としていた。「すでに高い能力を持っている日本語を学ぶことに疑問はなかったか」と問うた際、彼女は以下のように述べた。

【断片1 シャンファ 日本語以外のスキルを大学で身につけなかったことへの後悔】

社会人になってから感じたことなんですけど、例えばビジネスとかの話とか、そういう仕事に入った時、マーケティングとかの話ができるとスキルの一つ、違うものが取得できたかなーとか、あとはその、分析に強いってような人たちは、大学時代に理系の大学で、研究発表とか論文を書いてきたから、「比較する」とか、「ABテスト」をするみたいなのところでも、そもそもやり方とか手順とかかわかってるから、そういうことを先に習得しとけば、社会人になってからのスキル形成がもっと早くできたかなっていうことは、考えるようになりましたね。

このように、シャンファは、大学時代に日本語以外のスキルを身につけていれば、会社での業務により役に立っていた可能性があると述べる。一方で彼女は、自身がアドバンテージを持つ日本語を専門として選んだことで、日系企業でのインターン等、「好き勝手いろんなチャレンジができた」こともその後の就職に役立ったとも分析する。このように、幼少期の経験を成人後も活用することについて、若者たちは様々な側面から解釈しており、相反する感情を抱いている場合もある。

また、日本でキャリアを築くにあたって、幼少期には感じなかった「外国籍であること」の不自由さについて、焦燥感を示した者もいた。例えば、ヤオは、転職活動の経験について以下のように語る。

【断片2 ヤオ 在留資格による就職活動への制約】

いくら頑張っても、日本語もできて、英語もできて、博士を取ったとしても、日本人で、フリーターの人には敵わないって、思っちゃうんですね。(中略) 会社によっては「そのビザはちょっと嫌だな」とか、「永住権ならいいけど、これはちょっとな」っていう会社ももちろんいるって、転職のエージェントさんに聞いたので、なんか、そういうところではすごい不利だなんて、いくら頑張っても、外国人は外国人なんだなあって思うんですね。

ヤオは、自身が外国籍であるがゆえに、高い言語能力や学歴があるにもかかわらず、転職活動では在留資格の制約があり、困難だったと述べる。自身が幼少期の経験を活かしたキャリア形成をしようとしても、社会制度や社会環境の制約により、それが制限される可能性がある、という解釈である。

4.2.2 幼少期の移動経験と関連のないキャリアを選択した場合

次に、幼少期の移動経験と関連のないキャリアを選択した場合について示す。つまり、学業や就業の場所が日本ではなく、専攻・業務の内容が、日本や日本語と関連しない場合である。

このような場合でも、若者たちは何らかの形で成人後のキャリアと幼少期の移動経験を関連付けている場合が多かった。例えば、ヒトエは、アーティストとして活動する中で、直接日本語や日本に関する知識を使用することはないとしたうえで、以下のようにも述べる。

² インタビューを引用する際は下記の記号を用いる：直接引用：「」；段落を引用：【断片番号 協力者仮名 ラベル名】、協力者名の表記：◇。インタビューで主に中国語を用いている場合、本稿で引用する断片は筆者の和訳によるものである。また個人情報保護の観点から、研究に影響のない範囲に限り、インタビューの内容を変更している箇所がある。

【断片3 ヒトエ 幼少期の日本での記憶を生かした創作活動】

言葉では言いづらいんですけど、なんかすごく心が満たされる感じ。日本でなんか、優しくされた思いがすごく多いんですよ。その優しい思いが、今でも懐かしくて、なんかすごいふわんとした、優しい感じが心に残ってて、それは今の創作にも時々使ってますけど。なんか、その優しさに包まれた感じの、気持ちを思い出しながら、絵を描いたりすることもあります。(中略)結構多くのアーティストは、創作のアイディアが子どもの頃まで、戻されることがあって、子どもの時の感情とかが、結構創作のアイディアになってて、それで、私の創作の中に、よく日本の文化とか出ちゃうのになってると思ってます。

以上のように、ヒトエは、幼少期の記憶が創作のアイディアになっていると解釈する。類似のことは、服飾関連の会社を経営するグリも言及している。グリは中国国内での取引が多く、日本の会社との取引は少ないため、日本語を使う機会はあまりない。だが、幼少期の移動経験があるからこそ、様々な国に出張に行く際、「怖いとか、手に負えない」という気持ちはなく、「英語圏でも日本語圏でもなんとかなるだろう」という自信があると言う。このように、言語や越境した国への理解を直接キャリアに活用していなくても、若者たちは何等かの形で幼少期の経験とキャリアを関連付けて解釈している。

一方、わかりやすい形で幼少期の経験を活用していないことについて、残念な気持ちを併せ持っているケースもある。例えばグリは、日本語を今の仕事で使う機会が少ないことについて、以下のように述べる。

【断片4 グリ 日本語能力をビジネスに生かせていないもどかしさ】

自分でももったいないとは思いますが、中国人で、こんなに日本語能力が高いということも稀なので、私自身より周りの方がもったいないと思っているかもしれません。周りの人にも、夫や、母、友人たちにも、よく言われます。私自身は、何っていうか、どっちかというところ「恥ずかしい」「後ろめたい」という感じですかね。こんなに日本語ができるのに、日本の会社と大きな取引ができていないわけでもないのに。

グリは、周りの人からも日本語を十分に活用できていないことを「もったいない」と評価されるという。周囲からの「経験を活用すべき」という認識が、若者たちの経験活用への解釈に影響を与えている事例である。

5. おわりに

本研究は、幼少期に中国と日本を移動した若者のキャリア形成について、(1) どのようなキャリア選択をしているか、(2) どのような解釈をしているかについて、幼少期の移動経験と関連性の視点から分析した。その結果、以下のことを明らかにした。(1) 若者たちはキャリア形成の場所として日本かそれ以外の国か、キャリアの内容として日本語や日本に関係する専門や業務につくか否かを選択していた。(2) 移動経験と関連のあるキャリアを選択した場合、若者たちは経験の活用を喜ばしいものと解釈する一方、幼少期の経験に縛られている、社会制度の制約を覚える等、相反する感情を併せ持っていることもあった。幼少期の経験と直接の関連がないキャリアを選択した場合も、若者たちは経験とキャリアに一定の関連を持たせる解釈をしていたが、同時に、活用が不十分であると残念にも思っている。中国、日本以外の第三国での滞在をどのように解釈しているかや、転職等で、幼少期の経験とキャリアとの関連に変化が生じたときの解釈については、今後の課題とする。

参考文献

- 人見美佳, 上原龍彦(2018). 外国につながる子どものキャリアデザイン—「国」「ことば」の認識との関わりに着目して—川上郁雄・三宅和子・岩崎典子(編) 移動とことば。くろしお出版, pp. 106-124.
- 岡村郁子(2011), 「帰国体験を活かす」ことに対する意識とその形成要因について—帰国体験をもつ大学生へのインタビュー調査の分析から—, 国際教育評論, (8), pp. 28-43
- 佐藤郁哉(2008). 質的データ分析法—原理・方法・実践—. 新曜社
- サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実(編) (2019). 質的研究法マッピング—特徴をつかみ、活用するために—. 新曜社.
- 藤越(2024). 幼少期に中国と日本を往還した若者のキャリア形成—移動経験との関連性及び影響要因—. 母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 学会 2024 年度研究大会予稿集
- 坪田光平(2018). 中国系ニューカマー二世世代の親子関係とキャリア意識—トランスナショナルな社会空間に注目して—, 国際教育評論, (14), pp. 1-18.
- Vázquez, A. M., Trejo Guzmán, N. P., & Mora-Pablo, I. (2018). 'I was lucky to be a bilingual kid, and that makes me who I am': The role of transnationalism in identity issues. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 24 (5), pp. 693-707
- 渡辺三枝子(2018). 新版キャリアの心理学第2版—キャリア発展への発達のアプローチ—. ナカニシヤ出版.